1　動物福祉学

1.1　基本的な考え方

- 動物福祉（アニマル・ウェルフェア）…人による動物の利用を認めながら、その動物種らしい行動が発現できるように配慮すること
  ※キリスト教の思想が元になっている
- 動物の権利（アニマル・ライツ）…人による動物の利用を一切認めないという考え方
  →この考えの支持者にベジタリアンやヴィーガンがいる
  ※キリスト教の思想が元になっている
- 動物愛護…動物を愛し護るという考え方
  ※アジアや日本を中心とした仏教の思想が元になっている

★**3Rの原則**→実験動物の福祉を考慮に入れた管理

- Replacement（代替）…生体以外の方法（培養細胞やシミュレーションなど）を検討
- Reduction（削減）…必要最低限の動物の使用にする
- Refinement（苦痛軽減/洗練）…実験の中でできるだけ動物が苦痛を感じないように配慮
  ※人道的エンドポイント→動物があまりにも苦痛を感じていることが明らかな場合、実験の途中でも中止し、動物の苦しみを排除する処置（鎮痛薬や安楽死など）を行う時点を設定すること

★**5つの自由**→実験動物だけでなくすべての飼育動物に適応

- 飢え・渇きからの自由
- 病気・けが・痛みからの自由
- 恐怖・苦痛からの自由
- 不快からの自由
- 正常行動を発現する自由

1.2　飼育動物の福祉

- 環境エンリッチメント→特に展示動物では、ストレス軽減の目的で、食事や知覚・物理的/社会的刺激を利用して、動物が本来の行動をとれるように飼育環境を工夫すること
  ※ハズバンダリートレーニング→狭い飼育ケージなど環境に馴化させるトレーニング方法
  また、採血などが行いやすいようにトレーニングすること
- 飼育動物は本来の行動を制限されてしまうので、動物福祉や環境エンリッチメントに配慮した飼育を心がける必要がある

2　愛護適正飼育

（1）ペットとの共生のための環境

・ ドッグラン…明確な定義はなく「犬と飼い主がリードを離して遊べる広場」を指す

－ 犬との同伴旅行のニーズによりドッグランも増加傾向

－ よくあるトラブル　→他の犬や人に噛みつく
アレルギーのある犬に他の飼い主が食べ物を与える
避妊去勢を行っていない動物との望まない交配
衛生対策不十分（感染症の管理や糞尿の始末など）

・ 保護収容施設

－ 災害時の避難所やアニマルシェルターでの管理にはシェルターメディスンが適応される
→シェルターメディスンは、家庭とは環境が異なる集団生活（群管理）において、動物の心と身体を守るための専門の獣医学
→集団管理特有の、ストレス緩和や感染症管理などが重要
→日本ではまだ十分に浸透しておらず今後の課題である

－ 役割
①譲渡への取り組み、②適正数の受け入れと維持、③飼育崩壊など緊急時の対応、④災害時の基地局、⑤適正飼育への啓発活動、⑥トレーニングの普及と指導、⑦不適切な飼育への指導

－ **災害時はペットとの同行避難が努力義務**

・ 動物愛護センター

－ 捨てられてしまった、あるいは虐待を受けている犬猫を保護し、新しい飼い主に譲渡する活動を行う

（2）動物介在介入（AAI）

①動物介在療法（AAT）…健康、教育、福祉の専門家（医師、看護師、作業療法士…）が提供もしくは主導で行う動物を介在させた補助療法のことで、計画的にクライアントの身体的、認知的、行動的な改善や回復を目的として設定する

②動物介在教育（AAE）…教育の専門家（教師、保育士など）が提供もしくは指導のもとに動物を介在させた教育のことで、決められた方法に沿って行われる
AAEを実施する教員は関係する動物についての知識が必要

③動物介在活動（AAA）…動機付けや教育、およびレクリエーションの目的のために、人と動物のチームによって計画的かつ目的指向を持って行われる活動のことで、専門家による計画や評価は必ずしも必要ではない